

Title	2015年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告
Author(s)	鯨坂, 誠之; 井上, 千鶴子; 金田, 忠裕; 和田, 健; 東田, 卓; 古田, 和久; 土井, 智晴; 早川, 潔; 岩本, いづみ
Editor(s)	
Citation	大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要, 2016, 50, p.95-100
Issue Date	2016-12-17
URL	http://hdl.handle.net/10466/15171
Rights	

2015 年度ティーチング・ポートフォリオ作成 ワークショップ開催報告

鯨坂誠之*¹, 井上千鶴子*², 金田忠裕*³, 和田健*³, 東田卓*⁴,
古田和久*⁵, 土井智晴*³, 早川潔*⁶, 岩本いづみ*¹

A Report on the Workshop of Teaching Portfolio in 2015

Shigeyuki AJISAKA *¹, Chizuko INOUE *², Tadahiro KANEDA *³, Takeshi WADA *³,
Suguru HIGASHIDA *⁴, Kazuhisa FURUTA *⁵, Tomoharu DOI *³,
Kiyoshi HAYAKAWA *⁶, Izumi IWAMOTO *¹

要旨

大阪府立大学工業高等専門学校は、2009 年の第 1 回以降、年 2~3 回のティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催し、2016 年度の第 15 回終了時点で常勤教員 70 名中 52 名(約 74%)がティーチング・ポートフォリオを作成している。本稿では、2015 年度に開催した第 7 回の長期コース、第 14・15 回のワークショップの概要について説明した後、ワークショップ参加者の感想と考察を報告する。

キーワード： ティーチング・ポートフォリオ，教育改善，メンティー，メンター

1. はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校（以下、本校と略す）は、2009 年 1 月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ（以下、TP と略す）作成ワークショップ（以下、WS と略す）を開催した^[1]。

2009 年度に第 2 回^[2]、2010 年度に第 3・4 回^[3-4]、2011 年度に第 5~7 回^[5]、2012 年度に第 8・9 回^[6]、2013 年度に第 10・11 回^[7]、2014 年度に第 12・13 回^[8]、2015 年度に第 14・15 回の TP 作成 WS を開催した。長期コースは、2015 年度で第 7 回となる。2016 年度の第 15 回終了時点で、校長副校長を含めた常勤教員 70 名中 52 名(約 74%)が TP を作成している。本稿では、2015 年度に開催された TP 作成 WS の概要について記した後、第 7 回の長期コース、および第 14・15 回の WS に参加したメンティー及びメンターの感想と考察を報告する。なお TP についての詳細、特徴等については既報^[1-8]ならびに書籍^[9-10]を参照されたい。

2. ワークショップの概要

2015 年度に開催した TP 作成 WS の概要を表 1 に示す。参加した作成者（以下メンティー）と助言者（以下メンター）の人数は、表 1 の通りである。日程は、長期コースの第 7 回が 2015 年 4 月 3 日~12 月 28 日、WS の第 14 回が 2015 年 8 月 10 日~12 日、第 15 回が 2015 年 12 月 26 日~28 日である。なお、第 14・15 回ともアカデミック・ポートフォリオ（以下、AP と略す）作成 WS と同時開催で実施した。内容はオリエンテーションの後、メンターと数回に及ぶ個人面談（メンタリング）を交えながら原稿を作成し、その間、メンターはメンターミーティングを開き、メンタリングの進め方の報告と検討を行う。簡単なスケジュールを表 2 に示す。2015 年度の特徴は学内のメンティーよりも学外のメンティーの方が多いためである。一方、メンターを行う教員が多くなっており、本稿でもメンターの感想が多く記録されている。

第 14 回のスーパーバイザーは名古屋外国語大学・日本語教育センターの加藤由香里氏に、第 15 回のスーパーバイザーは福井県立大学 学術教養センターの山川修氏にご担当いただいた。また、第 7 回長期コースのプレゼンテーションは、第 15 回の WS 開催に併せて行っている。なお本校の WS は、2013 年にティーチング・ポートフォリオ・ネットワークが公開した TP ワークショップ基準を満たしている。

2016 年 8 月 22 日 受理

*1 総合工学システム学科 都市環境コース (Dept. of Technological Systems : Civil Engineering and Environment Course)

*2 一般科目 (Liberal Arts)

*3 メカトロニクスコース (Mechatronics Course)

*4 環境物質化学コース (Environmental and Materials Chemistry Course)

*5 機械システムコース (Mechanical Systems Course)

*6 電子情報コース

(Electronics and Information Course)

表 1 2015 年度に開催した TP 作成 WS の概要

	開催時期	メンティー	メンター
長期 第7回	2015年4月4日3日~12月28日	1名(学外0名)	1名(学外0名)
第14回	2015年8月10日~12日	5名(学外4名)	5名(学外2名)
第15回	2015年12月26日~28日	7名(学外7名)	6名(学外1名)

表 2 TP 作成 WS のおもなスケジュール

	第1日	第2日	第3日
午前		個人メンタリング ② TP 作成作業	個人メンタリング ④ TP 作成作業
午後	オリエンテーション 個人メンタリング ① TP 作成作業	個人メンタリング ③ TP 作成作業	TP 作成作業 プレゼン準備 TP プレゼンテーション 修了式
夜間	夕食会 TP 作成作業	夕食会 TP 作成作業	

3. ティーチング・ポートフォリオを執筆して

TP 作成を通して (岩本 いづみ)

TP を作成しませんか、と 3 年ぐらい前からお誘いを受けていたが、なかなか 3 日間缶詰になり、夜の部(?)もあるとなると、家庭のことをほっておくわけにも行かない身としては、そのような日程を捻出するのは難しい状況であった。そのうち、担任から解放されたらという約束で、育休から復帰して、2 年間の本科 4、5 年担任を終えたのちの 3 年目に長期で TP 作成をすることになった。教員になって丸 14 年、本校に移って丸 13 年が経過していた。当初は建設工学科の建築コースにおいて建築構造分野の教員が必要として採用された。その後、3 度の産休・育休を取得した。最初に産休に入ったときから、最後の育休終了までは、休業、復帰を繰り返す、実質勤務していた年月は半分程度だったと思う。この途切れ途切れのキャリアの間の中で、学校は 1 学科コース制になり、建築学ではなく土木工学の学位が取得できる専攻科が設置されるなど大きく変化していった。時には 3 カリキュラムが同時にはしっていた年もある。そのため、育休より復帰するたびに復帰前の授業をそのまま行うことはなく、改めて準備する必要があった。また仕事を離れていたため感覚も鈍っており、家庭、育児との両立でかなりしんどい時もあった。教育理念という理念を考える余裕もなく、日々目の前にある授業、業務をこなしている状況であった。そのような状況の中でも辞めずにきたのは、学生に教育する喜びを感じ、学生の持つパワーを分けてもらうなど、これまでの学生との出会いが私のかけがえのない財産となっているからである。理念といえるものかわからないが、「信頼関係を築くこと」を軸とし、なんとかこの混沌としていた 14 年間のこれまでの教員生活を振り返り、TP として作成することができた。また自身

の子育てと学生を育てるという点で共通項があることを認識し、これからの理念とすることができたことは大きい。採用された当初に学校が私に求めていたものと現在では変わってきており、それは何であるのか、また現在、私が学校に貢献できることは何であるのか、ようやく落ち着いて考えられるようになったと思う。また学生が私の教育で満足している点、不満に思っている点は何であるのか、また自分の教育の強みは何か、弱点は何であるのかを振り返ることができた。今回の TP を今後の教育改善に役立てたい。長期で作成といっても実際にはメンターと決めた次の締切直前に慌てて作成している状況であった。しかし、次の締切までに気がついたことを少しずつ記録しておくことは私にとってはありがたい方法であった。メンターの先生には多くのアドバイスを頂き、長期間お世話になりました。ありがとうございました。

TP を作成して (古田 和久)

確か酒の席で北野先生から TP を書いてみないかと誘われ、酔った勢い(?)で TP 作成 WS に参加することになった。WS の事前に頂いたパンフレットには、TP の基本的構造として「教育の責任・理念・方法・成果・今後の目標」があり、エビデンスが方法や成果に必要であることが書いてあった。しかし、本校教員として採用されてからたった 4 か月であり、それまで教員経験が全くなかったため、試験結果や授業アンケートなどエビデンスが全く存在しなかった。こんな状態で本当に TP が書けるのか?と WS に参加することに大きな不安を抱きつつ初日を迎えることになった。初回の個人メンタリングでは、エビデンス無しで、「今後の目標」に重点をおいて TP を作成することとした。ここから大変だったのは、本当はあるはずの「教育の理念」が全く自分から出てこなかったことである。それだけでなく、他の項目もほとんど出てこないことに非常に焦りを感じた。メンターはディスカッションを通じて私から「理念」の根本にあることを引き出そうとして頂いたが、それがほとんど出てこない状態で第 1 稿を書いた。それに対してメンターとスーパーバイザーから「他の人にはない自分の経歴」に「理念」が潜んでいるのではと指摘された。2 日目は、「理念」の前置きとして自分の経歴と、本校が自分に対し何を期待して採用したのかを推測して書くことをアドバイスされた。それによって「理念」の根本には、「ものづくりに対する情熱と執念」があったことによりようやく気がついた。それがあったからこそ、何度転んでもその度に立ちあがる力 = 「人間力」を得られたのだと。だから若い学生の「人間力」を向上させることが「目標」となった。さらに 3 か月間必死にやってきた授業の準備、すなわち「方法」が「理念」「目標」に有機的につながった。WS の 3 日間は、

これまでに経験したことがないくらい濃密であり、大げさかもしれないが、今までの人生を顧みる良い機会となった。上述したように今回のTPは、「成果(エビデンス)」が付かないという形式的には未完成なものとはなってしまったが、これからエビデンスが蓄積されていくので、それに応じてTPを改訂したいと考えている。最後に、WSにお誘いくださった北野先生、高専教員の先輩としてTPに関するだけでなく様々なアドバイスをくださったメンターの天内先生、スーパーバイザーとしてアドバイスをくださった加藤先生、そしてTPを作るという共通の目標を持って3日間同じ部屋で奮闘し、意見交換会で興味深い話をして下さった先生方に感謝を申し上げます。

4. メンターを担当して

メンティーの教育年数とメンターの役割 (井上 千鶴子)

第14回と第15回のWSで、それぞれ1名のメンティーを担当した。いずれも大学教員で、一人は若手、一人はベテランと言われるようなキャリアの先生であった。よくTPは若手、中堅、ベテランの、いつ頃書いたら良いかということが話題になる。本校のWSでは、第1回から若手、中堅、ベテランを取り混ぜた陣容であった。結論から言えば、書きたい時が書ける時である。その中でも、意外と若手が多いのが本校の特徴のように思う。最近ほとんどの方の在職者がTP作成WSを経験済みなので、新任の方をお誘いすることが多いせいもあるが、それだけでもない。当TP研究会の『実践 ティーチング・ポートフォリオ スターターブック』の覆面座談会でも、新任や若手の方があまり先入観なしに入っていくのではないかと発言があった。教育経験が少ないからと言って、怯む必要はないようだ。私は今までにどちらかというと、若手の方や教壇経験の少ない方のメンターが多かった。実習助手や技官で、単独で授業を持たない方もおられた。しかし教育実践はある。こういう方は、普段どのようなお考えで授業をしておられるか、学生にどう成長してほしいか、そのために何をしているのかなどをお聞きするうちに、その先生の教育理念が定かになっていき、評価資料が少ない場合は今後の課題として、理念中心のTPとしてまとまっていくことが多い。中堅の先生は、教育理念もあり、実践や教材や評価資料は山のようにあるということも珍しくない。ただし、実践と理念のつながりが普段は意識されていなかったりすることも多く、整合性を整理したりする作業になっていく。そうするうちに理念が深まったり、新しく気づいたりすることもある。さて、50代後半でゴールも見えてきた、仕事も校内委員などの業務の方が授業そのものよりも増えてきた、役職としての責任がある——そういう先生の中には、もう教育

実践も整理され、残りの年数でそれほど大きな目標を立てる意向もない、ということがある。教育の責任・理念・実践・評価といったTPの定型は、さほど苦勞もなく埋めていかれる。こういうメンティーのお話を聞くのは大いに勉強になり、WSに参加する醍醐味でもあるのだが、さてメンターの立場としては何をすればよいのか。特に教育理念などは、ご自身が長年考えてこられた哲学があり、ぼつとやってきたメンターと話したぐらいでは微動だにしないぞという人もある。もう出来上がっているから楽ではないかと言われそうだが、考えを深めてもらうための伴走者であるメンターとしては、自分の存在意義を自問することになる。手練れの(?)メンターには、うまく牙城を突き崩して新しい発見を導き出す人もあるが、凡夫の自分にはそんな自信もない。気を取り直して手順通りにお話を伺う。大先輩に向かって「こうしてください」とはなかなか言えないが、「こういう書き方もありますよね」と水を向けてみて反応を見たりする。いろいろな人があり、方針を変えない先生もあるが、可能性を検討される先生もある。結論は変わらなくとも、一度考え直し別の視点からの批評に耐えうるのか、ご自身の中で検討されることが確信を深めることになることもあるようだ。今回私が担当したメンティーは、私からすればWSの中で大きく変化されたとは感じていないが、目標の部分を増補され、最後に「様々に学びと気づきのあるWSでした。」との感想を寄せてくださった。大きな変更はなくとも、WSで対話をすることが、ご自身の教育理念や教育実践を再確認することに役立っており、その意義は小さくないのだろう。WSやメンターにはこうした効用もある。

メンティーのひた向きさに感動して (金田 忠裕)

2015年夏にTP作成WSのメンターを務めさせていただいた。メンターを担当させていただく度に毎回思うことは、メンティーのひた向きな姿勢に感動を覚えることである。日々教育研究活動に忙しい時間を過ごす中で、3日という時間を割いて、自分と向き合いながら、これまでの教育実践について「なぜ」「どうして」を繰り返して、TPを作成していく。我々メンターの助言はあったとしてもメンティー自身が気づくことを最も大切にしている。言語系教員のメンターは過去にも経験があるが、バックグラウンドとして、多様な国、文化背景を持つ人同士が共通に理解できる言語、共通語を目指すべきと考えていることである。そして言語学習にととまらず、言語を使ったコミュニケーション、そしてインターアクションまでつながっていくことにある。1日目にご自分の教育理念を徹底的に考えていただき、その理念に対して教育実践がどのように関わっているかをスタートアップシートを参考に結び付けてもらう。目次を決めることでTPの全体

像を把握する。2日目には字数は関係なく最後まで書き上げ、そこから余分なものをそぎ落としページ数内に収める。3日目にはエビデンス資料の確認をおこなう。メンティーが3日間のスケジュールを頭に描きながら作成していくと、どれくらい書けばよいかの目安になる。担当したメンティーは職場において主任としての立場から、作成されたTPを学生だけではなく、教職員にも読んでもらうことを目的に作成されており、かなりの部分を教育実践の可視化に重点を置いておられた。限られた時間の中で、自分のTPを作成するだけではなく、評価を含めた職場への導入を検討しているために、貪欲に様々なことを吸収されていた。自分と向き合うことで、これまでできていなかったカリキュラムの検証や教育効果についても課題が見つかり、次の目標が定まったのではないかと感じている。任期が決まっている中で、研究成果だけではなく、教育成果をまとめる一つの方法として、TPは有効な手段だと感じている。これからも作成される一人ひとりの方の手助けになることを祈りながらメンターを担当していきたい。

3回目のメンター体験 (和田 健)

2015年の年末に開催された第15回WSにおいて、私は3回目となるTPメンターを経験させていただいた。メンターとして初めてWSに参加したのは2010年度の第3回WSで、自身のTPを作成してから約1年後というタイミングであった。その後はWSからは遠ざかっており、2013年度に自身のTP更新をきっかけに第11回WSにメンターとして参加、そして今回で3回目の参加となった。今回、私が担当したメンティーは高専の数学科の先生で、高専教育歴も20年を超える大ベテランの先生であった。また、年末に大阪まで出張されてTPを作成されていることから分かるように、教育活動においても、これまでに様々な取り組み(最近ではアクティブラーニングを中心に教育活動の工夫)をされている先生であった。メンティーの先生の今回のTP作成目的は「自身がこれまでに取り組んできた教育活動を整理して振り返り、これからの教育改善につなげていきたい」というものであった。このTP作成において、私もメンティーも最も頭を悩ませたことは「整理して振り返る」という目的に対して、限られたページのなかにもどのような形でTPをまとめあげるかということであった。教員歴約10年となる私自身もそうであるが、着任当初から一貫している理念などというものはなく、PDCAサイクルのように、ある理念に基づいて実践して(あるいは実践できなくて)、それに対する成功や失敗の結果があり、それによって少しずつ(あるいは劇的に)理念は変わってきている。これは、メンティーの先生も同じであり、この変遷をどのようにTPという形にしてい

くかに大きく悩んだ。TP作成の目的次第では、現時点における教育理念だけを取り扱えばよいが、今回のように、この変遷を整理して振り返りたいとする目的においては、過去にどのような理念を持ち、それが何をきかっけに変化していったのか(しかも、その変化は複数回おきている)を組み込むことが非常に重要となる。スーパーバイザーとも相談し、限られた時間であったが試行錯誤し、最終的には、全体構成としては一般的なTPと同じ章構成とし、各章のなかは時系列に従って書き進めるという形で完成した。ただ、すべて時系列に記述していくと指定のページ数をはるかに超えることになってしまうため、方法と成果に関しては、過去のものとは大幅に削って比較的最近のものに絞って記述するという事になった。なんとか完成に至ったが、もっと良い方法があったのではないかという気持ちは少なからず残っている。WSを終えて感じたことは、過去2回のメンター経験を直接的に活かせるということがほとんどなかったということである。毎回のWSでは、メンターとしてではなく、ひとりの教員として勉強できることが多いが、自身が得ることばかりでメンティーに対してどれだけ役に立てたのかと振り返ると、不十分だと反省せざるを得ない。

久しぶりのTPメンターを担当して (東田 卓)

今年度、第14回では1名のTPメンターを第15回では1名のTPメンターをさせていただいた。これまで数年間APのメンターばかりであったので、TPのメンターは久しぶりであり、振り返るとTPメンティーにとって適切なメンタリングであったのかは常に悩むところである。もちろんTP作成WSの報告紀要を書くのも久しぶりである。APの場合、すでに一度TPを書き上げた方に、研究・サービスの項と融合させ、その先生の学校における「自らの立ち位置」を見出していただくのがメンターの仕事であると思っている。今回のお二人のメンティーは教育学部の教員として「最も教育が分かっておられるはずの先生」が、なぜどのように「教育」をしているのかの理念を見出すのに随分ご苦労されたお二人であったと感じた。むしろ教育学を教える先生であるそのことが一番の「生む」むずかしさを考えておられたのかもしれない。第14回の方は国語並びに日本語教育の先生で約10年間のキャリアのある先生で、海外での教育経験のある方であった。メンター経験者なら誰しもあることであるが、メンティーの語りを聞くだけで、思い、共感し、良きところは取り入れたいと感じるものである。この方の気付きは例えば模擬授業において、学生に体験させてその体験が学生における気付きであることを主張され、教員は単にその手助けをするだけと言う結論に到達された。学生自体の主體的な学びがうまくいくこと行かないことを合わせて

本当の学びであるとまとめられた。近年どこの高等教育機関でもアクティブラーニング（AL）が取り入れられているが、ALと言う言葉を用いなくても「模擬授業」がもっとも学生にとっての良きALの場であることに気づかれた。この先生の担当する模擬授業を経験をした学生が良き教師になってくれていることを願いたい。第15回の方は専任講師として英語や国際文化を教えられた後、特任研究員として高等教育の研究に従事した方であったが、博士論文のタイトルである「アメリカにおける教育論」に関する研究は一切勤務とは切り離された環境でのTPとなった。我々高専教員はAP執筆において教育・研究・サービスがほとんどの部分で重なる環境から見るととても異質に思えた。しかし、それゆえ、興味深く崇高な自分の研究は勤務とは全く別の時間に行うという一本筋が通っていて理解しやすく、TPからこの「研究」が全く除外されたため、流れは明確になった。TP執筆はもちろん教育が最重要であるが、この教育に関連深い研究やサービスを一緒に入れても良いことになっている。TPの執筆内容を教育に集中して研究部分をバッサリ切られた考え方に大変興味を持った。また、この方は教育の方法について多く語られたのであるが、その中心にある理念が見えづらく、理念の抽出がいつも「具体的方法論」に戻っており、理念の部分の執筆に大変ご苦勞されていた。かなり長いメンタリングをしながら、2つの学校を通した共通の「理念」として「学ぶ喜びを引きだしたい」に到達された。他のメンティーは通常理念が数個出てくるものであったが、この方は終始これが唯一無二の理念であるということで、この信念がさまざまな教育方法論に導くとまとめられた。TPの最大の特徴は自由度が高く型にとらわれないところにある。教育の理念の中に「私の信念」を入れられたのが印象的であった。研究員としてALを進められていたが、前任校での教育も知らず知らずの間にさまざまなALを取り入れられており、高等教育を経験されている方は常に教育に関して強い思いと教育に対する改善をしておられると感じた。久しぶりのTPメンターであったが、メンティーにとってもメンターにとっても一期一会であり、お互いにとって良きメンタリングができたのではないかと振り返る。今後もTP作成WSの中でメンティー・メンターの相互の成長を図ることができればと願いたい。

長期・通常のTPを担当して（早川 潔）

平成27年度、長期1名、通常2名の合計3人のTPメンターを行った。ここ数年、看護・医療系のメンターが多かったが、今年度は、建築系、経営系、看護系とさまざま方のメンターを行った。また、今回初めて長期TPのメンターを経験したので、長期TPを中心に、今年度のメ

ンター活動を振り返る。まず、長期のTPメンターについて述べる。今回は、スーパーバイザーとして東田先生に入っただけ、1ヶ月に1回のペースでメンティーとの個人ミーティングを5回繰り返して、TPを完成させる手助けをした。長期のメンターは初めての体験であったので、終始戸惑いを感じながらメンター活動をした。一番戸惑ったのは、前回の個人ミーティングのことをメモだけでは詳細に思い出せないことだ。短期では1日に2回程度ミーティングを行うので、メモが曖昧でも頭に残っているので、思い出せるが、今回、ミーティングの後にメモを残しておいたが、そのメモでは不十分だった。メンタリング中に、詳細なメモをとっておいたほうがいいように思った。それでも記憶をたどりながら、東田先生の助言を受けて、メンタリングを行った。一方、良かった点と言えば、TPに関して時間をかけて取り組めた点である。通常のTPでは、メンターから提出されたTPを短時間で読んでメンタリングしなければ場合がある。また、メンターが複数人いるので、スーパーバイザーとのミーティングは、スケジュールによっては慌ただしくなる。今回の場合は、TPの提出後、1週間程度空けて、メンタリングを行った。その後、2、3日空けて、スーパーバイザーとのミーティングを行ったので、話を整理できて、じっくりとスーパーバイザーと話し合いができたと思う。通常のTPでは、12月に経営系の先生のメンターを行った。経営の先生らしく、教育方針を経営方針のようにきちっと考えているように感じた。また、TPも綿密に考えて書かれていた。普段から物事を緻密に考えていると思われるので、教育理念も大学の理念も考えつつ、しっかり書かれていた。教育方法もいろいろ実践していたり、成果もあつたりしたので、メンターとしてはあまり助言することはなかった。私は綿密に考えるタイプではないので、メンティー側からしたら、私の助言に対して、物足りなさがあったかもしれない。今年の3月にも、摂南大学看護学部のTP作成WSに参加して、メンターをした。メンティーの先生は、非常に文章力というかプレゼン力のある先生で、TPの文章もさることながら、カバーページもユニークな図を描いていて、非常に勉強になった。摂南大のWSには、3年ほど参加させていただいているが、その都度、いろいろと勉強になることが多いと感じた。

異分野理解促進の機会として（土井 智晴）

私は平成27年度には12月26日から28日に開催された第15回TP作成WSにTP作成のメンターとして参加した。近年は、地域貢献活動として中小企業等への技術相談や産官学連携イベントへの出席など学外への出張も多く、なかなかTP作成WSに参加できない状況にあったが、平成27年の年末はスケジュール調整が付き、久しぶりの

メンターとなった。今年のメンティーは、福祉介護士を育成する短期大学の女性常勤教員であった。彼女が所属する専攻の学生数は2学年合わせても非常に少ないため常勤教員も少なく、彼女が一人で福祉介護士育成の主要科目を分担している状況であった。本校と分野が異なる教育機関において、定員数の減少は少子化が進む日本では避けられない問題であることを痛感した。また、彼女は所属する短大の卒業生であり、OG 教員であった。私も本校の卒業生でOB 教員である。これについても学んだ環境、教育する現場がかなり異なる彼女と私であったが、後輩たちを教育したいという気概には共通する点が多くあった。さらに、彼女は福祉介護士育成の介護実習のなかで高齢者等を介護する際の体の動きをカメラ撮影し、熟練した介護者の体の動きと実習生の体の動きを数値的に計測し、それらを比較して可視化することで実習生たちへの理解の深化を図るという取組を実践されていた。これについては、ロボット分野を専門とする私からも非常に関心が高く、メンタリングの最中、いくらかの時間をロボットについて語り、盛り上がりもした。そのように、工学分野のメンターと福祉分野のメンティーという異分野で教壇に立つ二人に、こんなに多くの共通点があることを発見しながら、私は福祉介護の現場やそこに卒業生を送り出す教育現場がもつ文化や問題を理解することができた。また、メンティーも普段では話題にしにくい職場環境のテーマやご本人の内なる信条的なテーマを話し合えたことが有意義であったといっておられた。その結果、彼女の教育理念および今後の目標が明示できた。私自身も学びの多いTP 作成WS となった。

5. おわりに

今回は、2名のメンティーと6名のメンターの感想及び考察を収録した。メンティーとして長期コースで取り組むことの利点や、新任であっても濃密なWS を経験出来ることなどが感想としてまとめられている。

また、これらに対応するかのようにメンターとしての役割が考察されている。TP 作成WS も第15回を数え、「感想」として記録され、取りまとめられているこの開催報告も8編に及んでいる。冒頭でも述べたように、本校ではメンティーのみならず、メンターの経験者が増えつつある。

今後は開催報告にまとめられている貴重な「感想」を体系的に整理していくことも重要であろう。

2016年8月には第16回、2016年12月には第17回のTP 作成WS が開催される。この原稿がこれからTP を作成するメンティーや、メンターとしての役割を担う方々の参考になれば幸いである。

謝辞

本研究はJSPS 科研費26350213の助成を受けたものです。

参考文献

- [1]北野ほか：日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して、大阪府立高専研究紀要、第43巻、pp.63-70(2009)。
- [2]北野ほか：第2回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告、大阪府立高専研究紀要、第44巻、pp.57-64(2010)。
- [3]北野ほか：第3回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告、大阪府立大学高専研究紀要、第45巻、pp.47-52(2011)。
- [4]北野ほか：第4回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告、大阪府立大学高専研究紀要、第45巻、pp.53-58(2011)。
- [5]北野ほか：2011年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告、大阪府立大学高専研究紀要、第46巻、pp.63-70(2012)。
- [6]井上ほか：2012年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告、大阪府立大学高専研究紀要、第47巻、pp.49-56(2013)。
- [7]井上ほか：2013年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告、大阪府立大学高専研究紀要、第48巻、pp.43-48(2014)。
- [8]井上ほか：2014年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告、大阪府立大学高専研究紀要、第49巻、pp.63-68(2015)。
- [9]大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会編著、実践 ティーチング・ポートフォリオ スターターブック～実質的な教育改善活動を目指して～、NTS 出版(2011)。
- [10]ピーター・セルディン著、大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳：「大学教育を変える教育業績記録」、玉川大学出版部(2007)。